



笑顔で自信とゆとりをもって 子供たちと向き合うために

茂原市立萩原小学校校長 さかい酒井 まさし昌史



学校は子供たちにとって楽しいところであってほしい。そのためには、職員も楽しそうで魅力のある学校でなければならないと考える。職員の皆さんには6年生の卒業アルバムに将来の夢として「〇〇先生のような先生になりたい」と書きたくなる教員になってくださいとお願いしている。

そのために、職員の皆さんへは、学校経営の基調として「笑顔で自信とゆとりをもって子供たちと向き合う」ために何をすべきか考えること、業務に当たっては「信頼」関係を築くことを基本とし、本校の合言葉である「活躍」を意識し、「創造力を働かせる」こと、「自分も含めて一人一人を大切にする」ことをお願いしている。

本校は、平成11年度から目指す児童像を「かしこく、つよく、やさしく、たくましく」と定め、その1文字ずつを取り、「か・つ・や・く（活躍）」を合言葉として、子供たちの活躍につなげてきた。職員、保護者を含め、子供たちの間にこの言葉と思いは浸透しており、素直で思いやりあふれ、何事にも一生懸命取り組もうとする児童が多い。これまで本校の教育に関わっていただいた全ての人々に感謝するとともに、この良き伝統を引き続き生かしていきたいと考えている。

子供たちの活躍の場面を確保しながら、働き方改革と人材育成を進めていくことは、本校の課題の一つである。

自信をもって子供たちと向き合うために、教員としての力量を向上させることは不可欠である。また、笑顔でゆとりをもって接するためには授業等を創造する時間と空間、及び自分を大切にする時間と空間を確保する必要がある、そのための働き方改革も進めなければならない。

様々な取組を組み合わせ、パッケージとして取り組んでいくことを考えた。

1 自信をもって子供たちと向き合うために (1)若手教員の力を伸ばす

若手が多い本校では、課題に対して「激論を交わしてください」と、対話の中で多くのことを学び、思いを共有していくことをお願いしている。

目標申告の面談では、学習指導や生徒指導、学級経営において、学校、学年を含め自分の目指している姿を明らかにし、具体的な目標（意識、行動、結果）と手立てについて、創造力を働かせてもらうよう助言している。併せて、キャリアステージに応じた身に付けたい資質能力や受講したい研修について、教員人生のストーリーを描くよう促している。

また、学校全体を見渡すとともに多くの職員と対話し、考えや思いを知り、合意形成を図る力をつける機会として、職員間の調整が必要な役割分担をまかせている。

更に、本校伝統の若手研修では、先輩教員から学ぶ機会を設け、必要な資質能力の向上に努めている。今年度は、日常抱えている学級経営、授業、生徒指導、特別支援教育等の悩みを話し合い、先輩職員の持ち味を生かしたアドバイスをもらえる機会としている。

加えて、学校外での研修や各種役員等は、様々な人たちと対話することで多くの視点や幅広い視野を身に付けることのできるチャンスととらえ、積極的に引き受けるように助言している。

迷惑かもしれないが、本校から転出する職員には、本校で学んでよかったと思えるように、多くの経験を積ませ、育ててから出したと考えている。

(2)個々の教員の力を伸ばす

中堅からベテラン層には、学年主任や各主任として全体をコーディネートする役割分担を担い、若手の育成とともに、常に全体を考えて学校運営に積極的に参画するようお願いしている。

管理職と特別支援教育担当は、採用選考で直接募集しておらず、各学校において育成していかなければならない。

成長期に学校全体を見渡す分掌を担当し、発展期には①専科教員（生徒指導担当）から生徒指導主任、②学年主任から研究主任、③特別支援教育担当から特別支援コーディネーター等、学校をリードする立場から学校運営に積極的に参画する人材を複数育成し、教務主任をまかせられる教員を増やしていきたい。

また、特別支援教育は、育成指標の柱にも示されたとおり、担当のみならず全ての教員が理解し、支援の方法を身に付けなければならない。本校は、特別支援学級（知2、情1）、通級指導教室（言語2、LD1）と学びやすい環境にある。そこで今年度は、特別支援学級の授業のT2枠を設け、教員に担当させることにより、個に応じた指導や配慮の必要な児童への支援の仕方等を学ばせている。今後、全ての教員が授業の交換や特別支援学級担任の経験を積むことも必要と考えている。全学級で一人一人を大切にしたい授業や学級経営が行われる学校を目指していきたい。

2 笑顔でゆとりをもって向き合うために

(1)時間の確保と専門性の向上

今年度、専科教員の県の研究指定を受け、専科教員を高学年中心に配置し、担任の空き時間を増やした。また、金曜日の下校を早め、時間を確保し働き方改革を進めている。

理科においては、各学年3クラス中2クラスを専科教員に行ってもらい、若手教員は専科教員から学びながら授業が行えるようにした。また、専科教員には、多くの学級を指導することから生徒指導担当とし、それぞれの持ち味を生かした指導で担任と連携した対応を積極的に行うように依頼している。

中学校の教員免許状を所有する教員の、専科教員としての活かし方及び専科教員の今後の育成と教員間のバトンタッチは大きな課題であり、計画的な準備が必要である。

また、道徳の授業を全校統一で木曜日の1校時に定め、同じ授業を3クラスで展開し、教材研究の負担軽減と学年全体の子供たちを指導できるようにしている。このことは、多くの教員が子供たちに関わることから、組織的な生徒指導へとつながるものと考えている。

(2)ICT機器の活用による負担軽減

職員の連携のためには情報共有が欠かせない。遅ればせながら、児童の出欠状況の共有や、生徒指導、学習指導等の情報を全職員が積極的に校務支援システムに記録することにより、全職員で個別に必要な指導へとつなげていく体制を整えている。

また、職員、児童の実態把握等にICT機器を活用することにより、効率的、効果的な業務へとつなげている。

3 子供たちの健やかな成長のために

本校では、近年、学校生活を確立するまでに手間と時間を要する新入生が増加傾向にあり、課題となっている。また、中1ギャップと呼ばれるように小中学校の接続も課題となっており、それぞれの連携の必要性が増している。茂原市でも今年度から、小中一貫教育を進めている。接続期を教育のリレーのバトンゾーンと考えるならば、幼保小と小中のバトンゾーンでいかにスムーズなバトンを受け渡しができるかをお互いに考えていかなければならない。まずは、学習指導や生徒指導等の相互理解によりお互いにどれだけ近づけるか、検討していきたい。同じゴールをイメージし、スピードを合わせ、声を掛け合いながら確実なバトンの受け渡しができるよう、できるところから進めていきたい。

課題は多いが、子供たちの状況を職員全体で共有し、子供たちのために何ができるのかを議論できる職場にしていきたい。



生徒にとっても教師にとっても 居心地の良い学校を目指して



君津市立周西南中学校教頭 **石井 聡**

1 はじめに

本校は、日本製鐵東日本製鐵所を中心に、関連企業が進出し、君津駅周辺を中心に大きく都市化、市街化が進んでいる地域にある。住民も全国各地から集まってきているが、最近は大きな移動もなく安定している。保護者の教育への関心は高く、要望は多様化し、特に、進学への意識は強い。

学区住民の学校教育への理解・協力度は深く、高いものがある。学校・地域社会の情報を共有し、学校の指導方針を明らかにすることにより、生徒のために協力しようとする志気は高まってきている。

本校には、令和3年4月に着任した。もともと中学校の教員ではあったが、教頭としては、前任校が小学校であった点と市外への異動であったため、コロナ対応や部活動の制限、事務処理の仕方等異なり、苦慮する点が多かった。そこから現在3年目となるが、今も、生徒や教職員はもちろんのこと、学校全体を支えるにはどうしたらよいかを日々悩み、実践し、反省する毎日を送っている。そんな中でも、今回、読者の皆様の何かヒントとなればと思い、私の実践をご紹介します。所存である。

2 市内初のコミュニティ・スクール

本校は、平成30年度に君津市立周西小学校と一緒に市内で初となるコミュニティ・スクールに指定された。その後、学校運営協議会が設置され、学校運営とそれに必要な支援につ

いて協議し、ここからというときに令和元年房総半島台風の猛威に襲われ、さらに新型コロナウイルスが流行し、その対応に追われるなど活動が思うように進まず、停滞してしまった。

昨年から徐々に活動を再開し、学校運営協議会の話し合いを元に、様々な活動に発展させようと地域と学校が協働して活動を推進するための「地域学校協働本部」が令和4年5月に設立された。この話し合いの中で、私が一番心に残った委員の言葉がある。それは、「学校の問題を地域の問題としてとらえ、対応策を考え取り組んでいこう。」という非常にありがたい言葉だった。さらに、この言葉に他の委員のモチベーションが向上したことが非常に印象的であった。その後、その言葉のとおり、活動へと繋げていった。

例えば、生徒や児童のコミュニケーションの力やリーダー性を育むために、地域学校協働本部の地域交流部会が中心となり、中学生が企画、運営し、小学生に楽しんでもらうといった「謎解き脱出ゲーム」を企画し、小中学生に参加を呼びかけ、実施した。

また、登下校時の安全について（交通安全や不審者対応など）、地域学校協働本部の学校支援部会が中心となり、「ながら・見守りパトロール」と題して、チラシを作り、地域の方々に参加を呼びかけた。これは、地域の方が、ジョギングをしながら、犬の散歩をしながらなど、ながらパトロールすることにより、生徒や児童を交通事故や犯罪被害から守る運動に繋げる活動である。



3 働き方改革に関する心構え

2年前、久々に中学校へ戻ってきて思うことは、やはり、中学校の教員もいそがしい。特に事務仕事に関しては、部活動後となるため早めの帰宅はかなり難しい。

そんな中で、私が常に意識していることが二つある。

一つ目は学級担任や教務主任等の立場に立って考えることである。教頭という立場に立ち、仕事に従事していると、とかく教職員の置かれた状況を忘れてしまうことがある。そのため、自分自身が学級担任や学年主任であった時のことを思い出すようにしている。それでも忘れていたことは多々ある。その時は、その都度担当に聞くようにし、何とか改善できないか方法を考える。また、職員からの情報提供や提案には感謝の気持ちで応えるよう心掛けている。最近では、他市の学校でWEBを活用した行事等の希望の日程取りまとめ方法について、職員から情報提供があっ

たため、早速、取り入れた。今まで紙面であったため、配付、収集、取りまとめに掛かっていた時間が短縮された。

二つ目は、コロナ対応が緩和され、様々な行事や会議等に関してコロナ前の状況に急激に戻そうとする傾向に注意することである。せっかくコロナ禍で培った様々な工夫や取組が生かされない点に疑問を感じている。本校では、今年度もPTA総会をWEB上での書面開催とした。この3年間書面開催として特に問題なく取り組めたことが理由である。

4 環境が人をつくる

当たり前のことではあるが、学校の環境には特に気を配り、「割れ窓理論」を念頭に生徒が学びやすく教職員が仕事をしやすい環境作りに取り組んでいる。学校周りをごみ拾いしながら挨拶運動することで、地域の方から学校の気になる個所等を知らせてもらえることがある。また、私自身、もの作りが好きで修理はもちろんのこと移動式のひな壇収納ケースや入学式などのステージ上の造花装飾などを作成し、設備の改善や働き方改革に繋がった。

5 おわりに

教頭という職に就いて6年目となる。管理職として常に広い視野に立って考えること、最後までやり遂げる実践力、人の立場や人間性を尊重する三つを心掛けている。また、問題に対しては、早期発見、早期対応、誠心誠意をもって誠実にかつ丁寧な対応を心掛けることで、生徒や保護者の信頼に繋がると考える。今後も生徒が日々安心して、なおかつ登校するのが楽しみになる学校、さらに生徒、保護者、地域と強い信頼関係で結ばれた学校を目指し、日々精進していく所存である。



子供と家庭の未来のために つながる→続ける→支える+支えられる

県子どもと親のサポートセンター 不登校児童生徒支援チーム
スクールソーシャルワーカースーパーバイザー かわしま りゅうた 川島 隆太



◎ はじめに

スクールソーシャルワーカー（以下、SSW）と聞くと、どのような印象を持ちますか？「いつもお世話になっている、あの方？」「今まで関わったことがないから…」など、印象は人それぞれです。これから、SSWについて伝えます。子供と家庭の未来への支援につなげてもらえたら幸いです。

1 スクールソーシャルワーカーの状況

SSWの職務内容は、以下の通りです。

①問題を抱える児童生徒が置かれた環境への働きかけ②関係機関とのネットワークの構築、連携・調整③学校内におけるチーム体制の構築・支援④保護者、教職員等における支援・相談・情報提供⑤教職員等への研修活動となっております。

職務の中心である「環境への働きかけ」というものは抽象的なものです。私はよく、「学校以外での生活」「家庭での生活」の中で、課題や不安を抱える子供と家庭への働きかけ＝相談・支援と伝えています。「家庭」が子供にとって安全であるかどうかは、学校での生活にも影響があります。SSWの相談内容としては、家庭環境（親子・兄弟姉妹など）、不登校、児童虐待、経済的な問題、ヤングケアラー、知的・発達障がい、心身の健康、非行暴力行為、いじめ、学校の教職員との関係など、多岐にわたります。中でも家庭に関する相談は多く、社会的な影響もあり、多様化で複雑化しています。

2 SSWの派遣申請の流れ

SSWは、学校や教育機関の知られない中で動くのではなく、子供と家庭が所属している学校から、SSWが配置されている学校もしくは教育事務所へ派遣を申請され、その決定を受けて、動くことができます。

その後、SSWは申請された学校へ行き、先生方から子供と家庭の様子を聞き、意見交換しながら、支援を始めていきます。

3 SSWの支援の流れ

学校に足を運んだSSWは、その後、以下のような内容で支援を進めていきます。

- ①インテーク（初回面談）
- ②アセスメント（情報分析 見立て）
- ③プランニング（支援計画）
- ④ケース会議（支援方針・内容決定）
- ⑤支援（介入、校内・関係機関連携等）
- ⑥モニタリング（継続的経過観察）

まず、インテークで、課題や不安、一方これから目指していきたいことなどを伺います。そして、アセスメントで、子供と家庭などの状況・情報を整理し、支援についての計画をプランニングしていきます。その後、ケース会議にて、関係する学校・関係機関などと共有し、支援に向かいます。子供と家庭への支援が単発的・短期的に終わることもあれば、継続的・長期的に続いていくこともあります。ですが、SSWが関わる支援については短期的に終えず、長期的に続けていく（つながり続ける）ことが望まれています。

4 長期的につながり続けることの大切さ

SSWの支援の特徴的なことのひとつが、子供と家庭と長くつながることができるということです。派遣申請が更新され、SSWが活動を継続できる状況となれば、小学校から、県立高校卒業まで関わることができます。私も実際、学校生活への適応に不安を抱えていた子供と家庭への関わりの中で、小学校2年生からはじまった保護者との対話は、中学校2年生を迎えた現在も続いています。あるSSWの話では、小学校のときに関わったことのある子供が、現在、高校生となり、明るく学校生活を送っているという話を聞いています。環境への支援に、校種・学年による終わりはありません。「人とつながること」の難しさ、「生きづらさ」を抱える現代だからこそ、その役割が求められているのかもしれない。

5 関係機関の方たちの協力

SSWの支援のもうひとつの特徴に「関係機関との連携」ということが挙げられます。これは、SSWは「ひとりの力」でできることには限りがあるということを知ってからです。

関わる関係機関は多岐にわたります。行政機関（児童相談所、市町村の子育て相談支援担当、福祉関係担当など）、医療機関、福祉施設や相談機関、警察、地域（民生委員、児童委員、NPO法人、子ども食堂）が挙げられます。中でも私は、児童家庭支援センターという、子供と家庭への相談支援に関わるセンターとの連携を重視しています。兄弟姉妹が多く今でいう「ヤングケアラー」の状態の子供と関わった際には、センター相談員と家庭訪問し、子供に「ひとりになれるスペース」を確保してほしいと伝えました。学校の先生も一緒に訪問し、励まし続けてくれました。それが子供の力になり、無事に小学校を卒業しました。

6 これからのSSW

「つながりのバトン」

先ほど、高校まではSSWは関わるができると言いましたが、中学校を卒業しても進路先が決まらない、高校を中退するなど、支援を終了せざるを得ないケースもあります。そのようなときは、地域に存在する様々な関係機関に支援を依頼することがあります。地域での居場所・活躍できる環境を作り、どのような状況であっても、子供が社会で自立して生きる⇒自分らしく生きることができるよう、そっと支えていきます。

「学校にSSW的な視点を…」

スクールカウンセラーと最近よく話す話題です。学校の先生方が、よりカウンセラー的・ソーシャルワーカー的な視点を取り入れることができれば、もっと救われる子供と家庭があるかもしれない。その視点を伝えることも私たちの役割だと考えています。

7 さいごに

今回、「学校を動かす」というテーマをいただきましたが、私にとっては恐れ多いことです。SSWとして、子供と家庭を支援し、「ケースを動かす」ということを意識し、ケースが動く中で、学校も自然に主体的に動いていく形が理想的です。また、「動いた」という結果よりも、そのプロセスが大切です。子供と家庭を支えるといっても、子供と家庭から教えられることや、実は私たちが支えられていたということもあります。これからも、千葉県のSSWたちと先生方が、ひとつずつ、支援のプロセスを積み重ね、子供と家庭の未来につながればと思います。

ぜひ、先生方もSSWをチーム学校の仲間たちに加えてください！



教科書を活用した外国語授業 ～内容理解から自己表現へ～



四街道市立四街道北中学校教諭 じつかわ 實川 ともこ 智子

1 はじめに

教員になって間もない頃、私は教科書の内容をどのように教えるかを悩んでいた。新出単語、文法説明、会話活動、音読や作文練習など、多くの内容が盛り込まれ、生徒たちが本当に理解できているかを確認することもなく、授業を進めていたように思う。そして、いつも私を悩ませていたのが、「教科書の内容をどう扱うか」であった。英語科の授業といえば、新出文法を用いた活動案が書籍やインターネット上でも多く見られるが、教科書の内容をどのように教え、また、どのように活用しているかを示した例は多くはない。生徒たちの反応を見ながら試行錯誤の段階ではあるが、現在実践している授業例を紹介したい。

2 授業の流れ

教科書には單元ごとに新出文法があるが、基本的にはその文法を学んだあとで本文を読むことにしている。30名以上いる集団授業では、英語が得意な生徒と苦手な生徒の差も大きい。苦手な生徒でも、習った内容を活かして英文を読めることを実感させるため、この流れを原則としている。ALTとの授業では新出文法の導入や練習、会話活動を中心に行い、それ以外の時間で教科書の内容を扱う授業を行っている。

(1)教科書の内容理解

①本文の概要をつかむ（動画視聴）

教育出版社のホームページに本文の内容を動画にした教材がアップロードされており、視

覚的にも非常にわかりやすく作られている。最初に本文に触れるときには、まずこの動画で導入する。その後、本文に関する簡単な質問を英語で行ったり、平易な英語で言い換えて説明したりしながら、概要をつかませる。

②本文に関するQ & A（ワークシート）

続いて、本文の内容に関する問題に取り組みさせる。これは教師用教科書に掲載されている英語での○×問題および英問英答である。ここまで、できるだけ日本語は使用せずに、英語のみに触れさせながらの理解を促す。その後、答え合わせを行うときには、適宜日本語で解説をし、生徒たちが正確に内容を捉えることができているかを確認する。

③本文の音読練習（ワークシート）

内容を理解した後に、授業でできるだけ多く音読の時間を設けている。英文を読む際に意味のまとまりを意識させ、英語の語順に慣れさせるために、まとまりごとに対訳をつけた以下のようなワークシートを配付している。また、キーワードを空欄にしている本文も載せることで、内容を頭に入れた上で表現を覚えさせながら音読の練習ができるようにしている。

Let's Practice!

No.	日本語	English
1	親愛なるハンナ	Dear Hanna,
2	私はちょうど戻ってきたところです。 スーリースイースト灯台から。	I have just come back from Souris East Lighthouse.
3	あなたの言うとおりでした。	You were right!
4	それは本当に美しかったです。	It was really beautiful!
5	私のホストペアレンツと私は てっぺんに登りました	My host parents and I climbed to the top

授業では、ペア、一斉、対訳、穴埋め、スピード対決、Read & Look Up、Overlapping、Shadowingなど多様な音読を行っている。単調になりがちな音読練習であるが、バリエーションを工夫し、飽きずに何度も音読させることを心がけている。

(2)教科書本文の復習

本文を一度の授業だけで理解させ、音読のみで終わってしまうのではもったいない。そこで、Kahoot!というクイズアプリを使って、本文の内容を復習する活動を行っている。Kahoot!では、生徒のタブレットを使ってオンラインでクイズ大会を行うことができる。クイズの種類は、選択問題・○×問題・並べ替え問題・短答式問題など多岐にわたる（一部の機能は有料）。速く正確に答えられると得点が高く、問題ごとにランキングが発表されるため、生徒が一番熱中して取り組み、盛り上がる活動である。

実際、このKahoot!で良い順位を取るために教科書の内容を熱心に復習する生徒もいる。生徒が楽しみながら教科書の内容を復習し、理解度を測るには非常に良いアプリである。Kahoot!では、個人戦とグループ戦があり、始めは個人戦で行っていたが、英語が得意な生徒がいつも上位を占めていた。そのため、最近ではグループ戦（ランダムに振り分けられるグループ）にしている。そうすることで、どの生徒にも上位に入るチャンスがあり、同じグループになった生徒同士、ヒントを出し合い協力するようになった。

Kahoot!は、授業で教師が問題を出すだけでなく、課題として配信し個々に取り組ませることもできる。また、生徒に問題を作成させると思考力を高める活動にもなり得る。

(3)本文の内容を発展させた活動

各パートのまとめとして、教科書の内容に関連した英作文やリテリング活動を行って

る。例えば、3年生のONE WORLDレッスン1では「赤毛のアン」が登場するが、現在完了形を学習する単元であることも踏まえ、自分が読んだことがあるかどうかも含めて「赤毛のアン」について紹介する英作文に取り組みさせた。以下、生徒の英作文である。

The book Anne of Green Gables was written by Montgomery. She was born in Prince Edward Island. This book was translated into Japanese, so it's popular in Japan. I have read it twice. I want to visit Green Gables someday. It will make me happy if I have a chance to go there.

よく工夫して書かれた英作文をモニターに映して全体へ共有すると、友達の書いたものを参考にしながら、苦手な英作文にも意欲的に挑戦する生徒が増えてきた。教科書にもThink & Try!というコーナーがあるが、教科書の内容を理解させるだけでなく、それを発展させて自己表現活動につなげることが大切であると感じている。

3 おわりに

かつて生徒に「英語の授業はゲームができるから楽しい」と言われたことがあった。授業が楽しいと思われることは嬉しかったが、「ゲームが楽しいだけで終わってはまずい」と自分の授業を反省するきっかけにもなった。限られた授業時間の中で、生徒の自己表現力が高められる活動を行うには、教科書を効果的に活用する授業を考えなければならないと改めて気づいたところである。ただ「楽しい」だけではなく、生徒が学習したことを用いて自分の考えを表現し、達成感を感じられる授業づくりを今後も目指したい。



対話力を高めるための実践



鋸南町立鋸南中学校教諭 ささき しおり 佐々木 詩織

1 はじめに

会話を継続させるために必要なこととして中学校学習指導要領解説外国語編では、『①相手に聞き返したり確かめたりする、②相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする、③相手の答えを受けて、自分のことを伝える、④相手の答えや自分のことについて伝えたいことに「関連する質問」を付け加える、などが考えられる。』と書かれている。そこで、その素地を養うために授業で行っている実践について紹介する。

また、日常生活の中の英語を使うであろう場面（海外旅行に行く・外国人に道を聞かれるなど）で、正しい英語でなくても自分の伝えたいことを相手に伝えられるようになってほしいという思いもあり、帯活動でこれらの活動を行った。

2 これまでの実践

(1)アウトプットの土台作りとなるインプット活動の工夫

会話を継続させる上で必要な相づち表現や聞き返し表現の練習、そして会話の中でよく用いる動詞や形容詞などの重要単語の練習を1分間のペアでの帯活動として実施した。1人はワークシートを見ながらリストの日本語を読み上げ、もう1人はそれに合う英語を何も見ないで答えていく。ペアで行っているため、相手が分からないものは教え合い、自分のペアが1つでも多く言えるように2人で協力してこの活動を行わせた。

1年生の1学期からこの活動を繰り返し実施したことと、幼稚園、小学校からの積み上げもあり、英語での会話の中で、相手から言われたことに対して反応することがあたりまえとなったり、基本的な単語を定着させたりするための一助となった。

(2)教科書を活用した帯活動の工夫

本校では教育出版社の『ONE WORLD』を使用している。教科書の後半に、既習事項を用いた質問と応答例が記載されており、それを用いた活動を帯活動として取り入れている。また、例文を言えるようになるまで反復練習したあとに、ペアで会話の練習を行った。その際、質問の一部を変えたり、応答例を自分のことに代えて言ったりする練習をすることで、相手に英語で自分のことが伝えられるように工夫した。ペア活動のあとは、言いたかったけれど言えなかった表現を全体で共有し、どのように言えばよかったか考えさせることで、生徒にフィードバックしている。例文をそのまま言うことにとどまっている生徒もいるが、英語への興味関心が高い生徒は、単語を一部変えるだけでなく、同じ話題で会話を継続しようとする姿勢が見られる。帯活動で扱った表現はALTとのスピーキングテストで用いるようにし、必要感を持って活動に取り組めるようにした。

(3) 鋸南町小中連携の実践

鋸南町では幼稚園から外国語活動を取り入れ、幼小中が連携して外国語学習の指導にあたっている。また、幼稚園から小学校、小学校から中学校への接続をスムーズにするために、年に3回程度幼稚園、小学校、中学校の教師が集まり情報交換を行っている。外国語活動や授業での実践を紹介したり、生徒の様子等について情報交換したりすることで、今後の指導の工夫、改善に繋げるためのヒントとしている。

その中で、幼小中共通の会話をするとき大切な4つのポイント（「volume」「eye contact」「gesture」「smile」）を決め、同じピクチャーカードを活動・授業中に用いている。そうすることで、授業での導入がスムーズになったり、生徒たちの不安の軽減に繋がったりしていると考えられる。また、小学校、中学校ではこの4つのポイントにとどまらず、会話をする際は「相づちをうつ」「相手の言ったことを繰り返す」「自分の言ったことに+1文する」「相手に質問する」ことを意識させている。一度に全部行うことは難しいが、幼小中の連携した指導や前述した帯活動での段階的な指導を行うことで、自然と相づちをうつことができるようになったり、自分の言ったことに1文加えて相手に伝えようとしたりする意識がでてきたように感じる。



(4) スピーキングテストの実施

これらの実践を通して、生徒に「英語で話すことができた」と達成感を持たせることができるように、会話を継続することを目標としたスピーキングテストを実施している。片方が言ったことに対して英語で返したら1ターンとし、そこから相手に質問するなどして何ターン会話を継続できるかで評価している。その際、相手役となるALTからは質問せず、生徒がどれだけ自発的に会話を継続しようとしているか分かるようにした。

これまで学習したことを用いて質問したり、自分の答えに1文加えて言うことができた生徒は、少しずつではあるが英語を話せたという実感を持っていくことが振り返りシートから分かった。また、修学旅行で奈良・京都を訪れた際に、外国人観光客に道を聞かれて、英語やジェスチャーを用いて案内することができたという生徒もいた。

3 今後の課題

スピーキングテストの様子を見てみると、自分の持てる知識を総動員して英語で話そうとする生徒が増えたように感じる。しかし、学習した表現を用いてALTに質問できるようになった生徒もいるが、同じ話題で話し続けることは難しい生徒がほとんどである。実践を通して、1つの話題に対して短いやりとりができる生徒は増えたが、今後は実際の対話場面をさらに意識して、1つの話題に関して対話を続ける練習をしていきたい。また、英語を書くことを苦手と感じている生徒が多いため、話すことを書くことに繋げていく実践も取り入れていきたい。



小学校教育の導入期の指導の工夫



東金市立福岡小学校教諭 ひらやま きよこ 平山 清子

1 はじめに

小学校へ入学した児童は、いろいろな幼児教育施設等で、遊びや生活を通した学びを経験して入学してくるが、在家、幼稚園・保育園・認定こども園とでは、多少経験が異なっていることから、新しく始まる小学校生活に対して、児童が戸惑う場面も見られる。

令和3年1月の中教審の答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図ること、接続期の教育を充実させることが必要であるとしている。また、令和5年2月に、中教審から「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」という提言が出された。

私自身、これまで1年生を担当する機会が多く、現在も1年生を担当しているが、入学当初に児童が大きな不安を抱いたり、つまずいたりすることのないよう、日々配慮している。そこで、私のこれまでの実践を振り返り、効果的であったと感じた指導のいくつかを紹介したい。

2 日々の授業の成功を支えるもの

(1)保護者との信頼関係づくり（入学式での教室環境・挨拶）

入学式当日は、児童・保護者とも大変緊張している。特に第一子の保護者は顕著である。

児童はもとより、保護者との信頼関係を作り上げていくために、すっきりとした教室環

境は必須である。「余計な物は置かないこと」「清掃が行き届いていること」で、清潔感と安心感のある教室環境ができる。

また、保護者に向けた担任自己紹介では、お祝いの言葉の後に、氏名、在校年数、昨年度の担任学年等を伝えるほか、最後に「不安なことや不明な点がありましたら、連絡帳でも、お電話でもかまいませんので、遠慮なくお知らせください。」の言葉を必ず添えている。

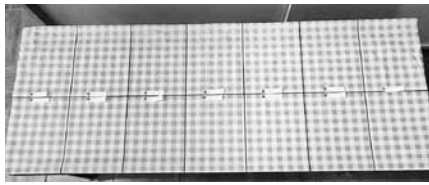
我が子の小学1年生の時の担任が、これらを伝えてくれたことで安心できたという自身の経験も踏まえ、必ず伝えるようにしている。

(2)1年生の行動習慣づくり

入学後すぐに、児童に身につけてほしい習慣についての指導が始まる。この指導が、1年間の学級経営等を支えるとても重要なものだと感じている。

①連絡帳の出し方

1年生は、毎朝、連絡帳を担当に提出し、担任が全員分チェックすることが通例である。1年生の保護者は疑問に感じたことをいろいろと記述してくることがあるので、担任は朝のうちに保護者の記入したことを把握しておきたい。しかし、毎朝の提出が習慣づくまでの手立てとして、配膳台などの広いテーブルにビニールテープで、出席番号・児童名を明記したスペースを作り、連絡帳を提出させている。これで、誰が出していないか一目瞭然となり、朝のうちに個別に声かけし、提出を促すことができる。



②学習規律（ルール）の指示の出し方

児童が、幼児教育から小学校教育に移り、戸惑うことの一つに、様々な学習規律がある。それらを、一つ一つ丁寧に、全員に教えることが大切である。

例えば

- 「気をつけ」は、ゲー（机と体の間隔）・ペタン（足の床つけ）・ピーン（背筋）
- 書く作業の前には「筆箱を出す」「筆箱は机の上の方に置く」「鉛筆を出す」「下敷きを挟む」といったものが、一連の動作としてできるようにする。

また、1つの指示を出したら、必ず数秒間の間合いをもって、全員を観察し、全員ができてから次の指示を出す。この数秒の待ち時間が大切で、児童の精神的安定にもつながると感じている。

3 授業について

(1)生活科

入学当初の生活科を中心とした合科的な指導については、児童が幼児教育から小学校教育へ円滑に移行するための工夫が求められている。児童は教科書との出会いが初めてとなるので、表紙を眺めながら、気づいたことを自由に発言させる。そこで担任は、児童の知識量や語彙力、発言力などを把握する。

また、生活科の導入の学習では、写真を元に小学校生活の一日を知らせていく。これまでとは時間の区切り方や活動内容の違いも大きい。それらの違いにふれながら、一人一人の児童の発見を肯定的に受け止めながら知らせていく。清掃活動については、実際に掃除

用具入れから用具を一つ一つ出し、使い方を実演する。これが清掃指導の第一歩となり、清掃活動に対する児童の不安が軽減する。

生活科に限らないが、どんな活動においても、幼児教育段階での経験を把握する。それは、その後の授業の組み立てにも大きく影響するためであるが、活動前に必ず児童に「今までに、やったことがある人？」と挙手させ、実態を把握するようにしている。

(2)国語科

最も配当時間が多く、最初のノート指導となることが多い。鉛筆の持ち方、ノートの使い方、日付の書き方を覚えさせる。一人一人を観察し、全員ができたところで、次の指示を出すようにする。

音読は「指なぞり読み」「担任と児童での交互読み」「丸読み」「列ごと読み」などのバリエーションをつけて、工夫している。

(3)算数科

算数科では、すぐに数図ブロックを使用する学習が始まる。そこで「算数セットの出し方・しまい方」の指導の後に、算数セットで遊ぶ時間を十分に取り、見て触る時間を確保する。これで、算数の時間での使用がスムーズに進められる。



4 おわりに

「小1プロブレム」という言葉があることから、小学校1年生の担任が果たす役割はとても重要だと感じている。今後も、児童と保護者に寄り添いながら、日々の実践を積み重ねていきたい。